



上空からの富士山
(撮影：徳真会グループ 代表 松村 博史)

国力

— 学問と民度と政治 —

最近、訪日外国人の増加が顕著になってきました。

円安の恩恵も有ってか、国力の低下を考えれば必ずしも喜んでばかりいられない面もありますが、海外からの訪日客が日本の歴史や文化、そして国柄を肌で感じて親日的になってくれる事は、外貨獲得効果も含めて歓迎すべき事だと考えます。

しかしながら、某隣国からの訪日客のマナーの悪さには眉をひそめることがあちこちで散見されます。

先日も明治神宮の境内で大声で喧嘩している某隣国人もいて、その国の国家そして国民の有り様を見ても民度の低い国柄だと思わざるを得ません。

やはりしっかりした学問に基づいた教育を受けていない国家の危うさを感じざるを得ません。

翻って現在の日本を見ても、この国の行く末に不安を感じる時代になってきている様に思います。

人の人格形成にはしっかりした学問が必要で、故安岡正篤先生は、学問には修養の学問と学校の学問とがあり、今日の様な学校の学問では一向に修養の役には立たないと書いておられます。

そして、学問は、「経」、「史」、「子」、「集」の四部の書に基づく事を書いておられます。

「経」：如何に生きべきかの原理的書

「史」：どう生きてきたかという歴史書

「子」：秀でた一家の言

「集」：私淑できる優れた人物研究の書

要するに、人間は真の学問を通して己の修養を行い、人々に尊敬され信頼される様になる努力の大切さを説かれています。

そして国家の盛衰、国民の民度はその国家の政治の如何によって決まり、世の興るも亡ぶも政治家、特に政府、政党のリーダーの見識、胆識如何により影響を受けるとも述べておられます。

リーダーたる人物が因循姑息^{いんじゆんこそく}な政治を繰り返す限り国家、国民のレベルは衰亡へと向かうのは必定であり、今日の日本の国力の低下はそこに有ると思っています。

GDPで中国についてドイツにも抜かれ2位から3位、3位から4位に後退し、一人当りのGDPでも今年、韓国にも抜かれ世界34位に落ちたにも関わらず、こうした事を大きく取り上げもしない日本のマスコミや政治そして国民は果たして大丈夫なのでしょうか。

世界各地で戦争や争乱が頻発し、世界の平和や安全が脅かされてきている今日、我々は、もっと国家の行く末に関心を持ち、眼前の些事にとらわれる事なく、大局的に観て、国力の向上こそが世界に発言力を持つ事を認識し、将来の為に今、我々は何を成すべきかを考える国民でありたいものです。

徳真会グループ
代表 松村 博史